

監修

佐佐木信綱
新田出
津田左右吉
柳田國男
山田孝雄
和辻哲郎

與謝蕪村集

穎原退藏校註
清水孝之增補

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書第八十五回配本

「與謝蕪村集」◎ 穎原退藏校註

清水孝之增補

昭和三十二年十二月二十日初版發行

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 三八〇圓

目次

解 説 三

生涯について 一六

編 著 八

評論 一〇

燕 村 年 譜 三〇

凡 例 四九

發 句 篇 五一

燕村句集 五三

春之部 五五

夏之部 五七

秋之部 九八

冬之部 一三〇

蕪村遺稿……………一四三

春之部……………一四

夏之部……………一五

秋之部……………一六

新花摘・發句篇……………一九

文章篇……………二〇五

新花摘・文章篇……………二〇七

句合類……………二九

一、十番左右合……………三六

序跋類……………二四〇

一、古今短冊集跋……………二四八

二、夜半亭發句帖跋……………二五〇

三、鬼貫句選跋……………二五〇

四、平安二十歌仙序……………二五三

五、貞德終焉記奧書……………二五三

六、其雪影序……………二五七

二、句合判詞草稿……………三六

七、太祇句選序……………二四八

八、此ほとり序……………二五〇

九、也哉鈔序……………二五〇

一〇、むかしを今の序……………二五三

一一、芭蕉翁付合集序……………二五三

一二、左比志遠理序……………二五四

短篇類

一三、春泥句集序	二五
一四、封の儘跋	二五
一五、蘆陰句選序	二六〇
一六、桃李序	二六一
一七、花鳥篇序	二六一

一八、俳題正名序	二五三
一九、五車反古序	二六四
二〇、宴樂序	二六五
二一、隱口塚序	二六六

二六七

一、木の葉經	二六七
二、宋屋追悼辭	二六八
三、顔見世	二六八
四、蓑虫說	二六九
五、宋阿卅三回忌追悼	二七一
六、乾鮭の句に脇をつぐ辭	二七三
七、洛東芭蕉菴再興記	二七三
八、浪華病臥の記	二七七
九、檜笠辭	二七六
一〇、伏波將軍の語	二七六

一一、追慕辭	二八〇
一二、宇治行	二八一
一三、歲旦說	二八三
一四、夢說	二八五
一五、螺盃銘	二八六
一六、春の月	二八七
一七、點の損德論	二八八
一八、二見形文臺	二九一
一九、梅女に句を送る辭	二九五
二〇、芭蕉の眞蹟に添ふる辭	二九六

二一、雪亭の號を與ふる辭	二九七	二六、牛祭	三〇一
二二、月夜の卯兵衛	二九七	二七、自贊の詞	三〇一
二三、題春草	二九六	二八、宋阿の文に添ふる辭	三〇三
二四、百物語	二九六	二九、茶釜賣	三〇四
二五、歲末辭	三〇〇	三〇、焦尾琴說	三〇五
短文類	三〇六		

春	三〇六	秋	三〇四
夏	三二〇	冬	三〇六

畫贊類	三二八
-----	-----

一、天の橋立圖贊	三三八	八、土器賣贊	三三七
二、定盛法師像贊	三三九	九、俳仙群會の圖贊	三三七
三、馬提灯	三三〇	一〇、狐の法師に化たる畫贊	三三八
四、其角眞蹟贊	三三二	一一、鍬の圖贊	三三九
五、高麗茶碗圖贊	三三三	一二、漫畫の贊	三三九
六、其角句稿贊	三三三	一三、怪物圖譜	三三〇
七、葛の翁圖贊	三三四	一四、辨慶圖贊	三三三

一五、歛の贊……………三三

一七、富士面贊……………三五

一六、水落石出圖贊……………三四

雜類……………三六

一、晋我追悼曲……………三八

三、澱河歌……………四一

二、春風馬堤曲……………三六

四、取句法……………四二

連句篇……………四五

此ほとり……………四七

一夜四吟發端……………四七

其三……………四五

四歌仙 其一……………四九

其四……………五八

其二……………五三

俳諧もゝすもゝ……………六一

俳諧桃李序……………六一

索引……………六九

與謝蕪村集

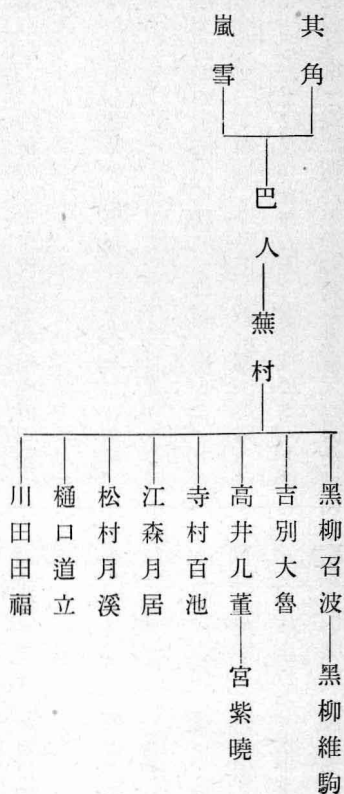
清 穎
水 原
孝 退
之 藏

解 說

生涯について

享保元年、攝津國東成郡（現大阪市都島區）毛馬村に生れた。蕪村の出自に就いては殆ど傳へる所がない。父母の姓氏は勿論、蕪村自身の本名すらも分らない。ただ父は攝津毛馬の村民で、やや主だつた人物であつたらしく、蕪村の少年時代はこの毛馬村で送つた。母に就いても種々の口碑はあるが、要するに不明である。

蕪村は幼時から畫をかく事を好んでゐたといふが、長ずるに及んでも父祖の産を治めず、遂に遠く江戸に漂浪の客となつた。それは彼がまだ二十歳を多く出ない頃であつたらうと思はれる。江戸に出た彼は、最初、沾徳門の内田沾山に就いて俳諧を學んだといふが、その時代の事に就いては、今全く知る所がない。その後元文二年の夏、早野巴人が京都から歸つて、本石町の夜半亭に居を定めるや、蕪村は逸早く巴人に師事することになつたやうだ。當時彼は宰町と號し、元文三年正月の「夜半亭歲旦帖」、夏刊行の「卯月庭訓（露月撰）」等に初めてその句を見る。爾來結城の砂岡雁宕いづもがと共に、師に奉仕する事最も篤く、元文



四年十一月、巴人の撰になる其角・嵐雪卅三回忌集「桃櫻」には號を宰鳥と改めて、江戸の俳壇にも相當名を知られるやうになつた。然るに寛保二年六月、彼が二十七歳の時、師巴人は病んで歿した。當時蕪村の實力を以てすれば、師歿後といへども江戸俳士の間に伍して行く事は、さまで困難でなかつたらうと思はれるが、彼はそれを屑くずしとしなかつたのか、同門雁宕と共に江戸を去つて雁宕の郷里結城に身を寄せる事になつた。

この結城・下館地方は雁宕の關係で巴人門の俳人が多かつたので、自然ここかしこの俳席に列なる事も度々であつた。併し蕪村が江戸を去つた主な動機は、田園に起臥し、山水の間に悠遊して徐ろに畫想を練

り、詩神を養はうとするにあつたらしい。勿論江戸時代も全く畫事に携はらなかつたのではないが、彼が愈々畫家として立たうと決心したのはこの結城時代以後の事であつた。かくて彼は野總の間を歴遊するのみならず、果ては遠く奥羽地方に遊んで具に旅の艱苦を嘗めた。この大行脚は寛保・延享の交であつたと思はれるが、その間の生活は彼の大きな藝術を生むための最も尊い試鍊であつた。彼の高い詩眼と深い自然觀とは、この行脚の中に養はれた事が多かつたに違ひない。行脚から歸つた彼は或る時は知友の許に寄寓したり、或る時は結城の弘經寺などに滞在したりして、その間只管丹青の技を練つた。今も同地方に彼の遺作を多く發見するのである。かうして結城時代は主として畫家としての修練期であつたが、俳諧も亦好む儘に口吟を絶たなかつた。特に寛保三年の末から暫く宇都宮に足を留めてゐた間には、その地の俳人に擁されて寛保甲子の歲旦帖（岩波文庫「蕪村俳句集」附録）を出した位であつた。この時宰鳥の號と共に、初めて蕪村の號が併用され、この後は蕪村の號のみが專用される事になつた。延享・寛延の交數年間、彼はやはり常總地方に流寓してゐたが、寶曆元年の冬に至つて、飄然として西に向ひ京都の人となつた。それは丁度寛保二年江戸を去つてから放浪十年の後である。時に三十六歳であつた。どうして急に西歸するに至つたか、その原因は分らない。恐らくいくらか故郷忘じ難い念もあつたらうが、やはり繪畫修業の目的が主であつたのだらう。併し俳人としての抱負も亦十分持つてゐた。かの友人毛越の「古今短冊集」に跋した文を以て見ても、當時の盛んな意氣は分る。當時京都の俳壇は、貞門系・淡々系の勢力が最も盛

んであつたが、先師巴人の遺弟知友も相當にゐるし、再び夜半亭の遺風を顯彰することも困難ではなかつた。だが先輩望月宋屋等に憚つたものか、それともより畫道に精進したかつたためか、上京後數年ならずして丹後の與謝へ去つて、ここに三年餘を送つた。彼が與謝に遊んだのは、その母がこの地方の出身であつたからだと傳へられてゐるが、或はさうした因縁もあつたのかも知れない。とにかく彼は宮津の見性寺の住職竹溪和尚をたよつて、ここに寄寓しながら與謝の海邊や加悦の谷々を往來する事になつた。この間勿論彼の志す所は繪畫の技にあつた。年、初老に及んでなほ家庭を成さず、邊僻の地に放浪しつつ只管自分の藝術の成長に魂を打込んでゐたのである。彼が結城時代から用ひてゐた朝滄・四明等の落款ある遺畫が、與謝地方に今なほ數多く残つてゐるのを見ても、當時の彼の努力振りは窺はれる。ともあれこの與謝時代は、畫人蕪村としては最も注意すべき時代であつた。それだけ俳人としての活動は少かつたが、なほ全くこれを閑却したのではなく、橋立見物の風人を迎へて同地方の好士と唱和したりする事も屢々であつた。かうして三年の歳月を送つた彼は、寶曆七年の秋、再び京都に歸つて姓を與謝と改めた。蓋しかの地の生活を深く記念するためであつたらう。歸來彼はやはり俳諧には専らでなくて、丹青の道に精進を續けた。かくて寶曆末年頃からの彼の畫作には、著しい進境が認められ、その天才と努力とに相俟つて、ここに畫入謝長庚としての大成を見るやうになつた。而して明和年間に至つては、彼の畫名益々顯はれ、やがて四條烏丸に一家を構へて落ち着く事が出来る程になつた。

この間、一方俳諧も絶えず續けてはゐた。彼と相前後して上京した太祇や、巴人の遺弟等との交渉もあつたし、若干の門人すらも出來た。特に畫業によつて多少衣食の安定が得られると共に、彼の俳諧熱も漸く高まつて來た。そして明和三年には、太祇・召波等を初め七・八人の同志と三葉社を結び、毎月兼題の句會を催す程の熱心さになつた。尤も明和三年から五年にかけて、蕪村は畫用のため屢々讃岐地方に來往したので、この句會も休み勝ちであつたが、明和五年夏讃岐から歸つて以來は、毎月定つて一・二回も開催され、社中に加はる人々も多少増加した。かくて蕪村の俳人としての生活は、ここに新たな展開を見るに至り、やがて周圍の人々は彼を推して夜半亭二世の統を嗣がせた。それは明和七年の春の事で、彼の年齢既に五十五。宗匠としての立机は實は遲きに過ぎるのであるが、これは全く從來畫家としてのみ立つつもりで、俳諧師として衣食の道を講ずる考へがなかつたからである。併し既にかうして京師點者の列に加はり、彼を支持する門人の數も多くなると、彼の俳諧に對する熱心さは加速度の勢ひで増して來た。その活動の跡は明かに文獻の上に示されてゐる。

そして安永二年に出た「明鳥」時代には、几童の序文でも知られる通り、將に蕉翁の粉骨を探り不易の正風に眼を開かうとする盛んな意氣を示した。「其雪影」まではまだ内容的に雜駁さばくを免れなかつたが、この頃は漸く洗練された句風を示し來り、更に「續明鳥」に至つて、かの絢爛高雅な格調が俳壇に燦然たる光を放つやうになつた。かうして蕪村の俳諧は、實に安永年間に至つて初めて大成され、天明新調の巨匠

たる地位が確保されたのである。即ち彼が夜半亭二世を嗣いだ事は、單なる形式的の問題でなくて、實は俳人蕪村を生むために、最も深い關係を持つてゐたのである。彼が若し晩年かうした俳諧生活を持たなかつたとしたら、畫人謝寅の名は不朽であつたかも知れぬが、俳人蕪村として傳はる所は殆どなかつたであらう。言はば明和末年以後約十年間こそは、彼の名を俳諧史上に光輝あらしめるための年月であつた。芭蕉の藝術の大成が、やはり晩年十年間にあつたのと對比して、全くその揆を一にしてゐるのも面白い。而もこの間彼の畫道に於ける精進も、決して尋常ではなかつた。否畫事に於ても亦眞に大成の域に達したのは、やはり明和末年以後であつたと言はねばならない。

かうして老來益々豐饒かくやくとして畫俳二道に神采を發揮してゐた彼も、天明三年冬の初めから何となく氣力衰へ、妻子や兩姉を初め、門人月溪・梅亭等の介抱を受けてゐたが、十二月二十五日、冬鶯・白梅の三句を最後の吟詠として遂に歿した。折から歲暮・年始の際であつたから暫く喪を祕し、翌年正月二十五日、再び葬式義信を盡して法會を營んだ。その臨終の様は、几董の「夜半翁終焉記」(から檜葉、所收)に詳しく記されてゐる。又その十七回忌には宮紫曉(几董門)が「常盤の香」を編して冥福を祈り、明治十五年百年の諱辰には、門人寺村百池の孫百僊が蕪村の墓所金福寺(京都市左京區一乗寺才形町)境内にその碑文を建てた。

謂はゆる「蕪村七部集」(文化五年刊)の如きは、實は蕪村の力に負ふ所が多いのであるが、各集の編纂は主として几董の手に成つた。直接蕪村の手を下したものは「花鳥篇」だけである。又安永五年道立の發起で、金福寺に芭蕉庵を再興して寫經社を結んだ時の記念集「寫經社集」も、蕪村自らその中の「芭蕉庵再興記」の板下を書いた。その外その編著を次に擧げておく。

明和辛卯春、一冊(夜半亭となり最初の春帖として注意さるべきもの) ○昔を今、一冊(安永三年刊。巴人卅三

回追善集) ○玉藻集、一冊(安永三年刊。編集態度は寧ろ杜撰といふべく信憑し難い點が多い。勿論、蕪村は自らかうした面倒な仕事など企てさうにも思はれないから、恐らく書肆が彼の名を借りたか、若しくは無理に頼んでやつて貰つたものであらう)

○芭蕉翁付合集、一二冊(安永三年成、同五年刊。芭蕉の附句を三句の運びに就いて示し、初心者

の範としたもの) ○夜半樂、一冊(安永六年の春興帖として編じたもので、中に、かの名高い「春風馬堤曲」が收められてゐる) ○新花摘 ○俳諧三十六歌仙(寛政十一年刊。寛政版の如きは、よし眞蹟でないにしても、最も彼の筆致に近いものであらう)

蕪村の作品は「蕪村句集」「蕪村翁文集」等によつて傳へられてゐるが、なほ門人百池の記録にかかる蕪村一派の句稿、並に蕪村自筆の遺稿等が傳へられて居り、明和以後の彼の作品は殆ど完全に知ることが出来る。その外蕪村の判した十番左右合が「反古瓢二篇」(文政七年刊)に、取句法が几董の「點印論」の中に收められてゐる。なほその句集や全集等は、明治以後數種出版されたが、額原退藏編「蕪村全集」と日本